

紫式部集 110番

「たえぬちきりし世々にあせすは」

をめぐって

管野 美恵子

七日

川おほかたにおもへはゆゝしあまの川

けふのあふせはうらやまれけり

返し

川あまの河あふせはよそのくもゐにて

たえぬちきりし世々にあせすは

『紫式部家集』巻末近くに位置する一組

の歌であるが、この贈答について多少考

るところを記してみたい。

『風雅和歌集』は110番を季の歌とみて紫

式部のものとし、「七夕の歌の中に」との

詞書をもって「秋歌上」に入れている。し

かし家集における配列は、108から113の六首

すべてが恋の歌と思われる一連の歌群とな

っているので、この贈答もやはり恋の贈答

とみた方がよいと思う。そこで、『風雅和

歌集』のように110番を式部の歌とし、かつ

恋の贈答と考えてみると、「世の常には不

吉と言われる天の川の逢瀬ではあります

が、そのはかない逢瀬さえ今宵の私には羨

ましく思われることです。」と、忘れられ

た身の恨みを言いやうた式部の歌と、「絶

えぬ契りさえいつまでもあせないものなら

ば(それでよいではありませんか)」となだ

めた男の返歌ということにでもなるうか。

だが、現在諸説は、

七日の夕「大方を思へばゆかし天の河

ふの逢瀬は羨まれけり」とやさしい恋歌

をよこす若き殿上人もあつたが……(紫

式部は)「天の河逢ふ瀬はよその雲ゐに

て絶へぬ契りし世々にあせすは」と宇治

の大君をおもはせるプラトニックな愛の

歌で答えて、地上の愛は拒絶してゐた。

(岡一男氏『源氏物語の基礎的研

究』)

また七日の夜、宣孝から歌で「年に一度

というのは縁起でもないが、今宵の七夕

の逢瀬は羨ましい」といってくると、式

部は「二人の逢瀬はあの世まで続くでし

よう。交した契りさえ色あせないならば」と人妻らしい素直な歌を返した。

(今井源衛氏「紫式部」)

逢えぬ事情にあつたのであろう。任務か、物忌みか、逢えないから星合いが羨まれるのである。彼女もそれを諒解していたので、「絶へぬ契りし世々にあせずは」と二人の仲の契りさえ変らなければ、後の世まで続き、逢う折がある筈と慰めている。安定した夫婦関係にあり、他の女へ通つたための夜がれではない。

(竹内美千代氏「紫式部評釈」)

などと解されている。

岡氏は、『紫式部集』はおおむね年次的に配列されている、との見解にもとづいてこの贈答を、式部官仕え後のものとされたのである。それに対し今井氏は、この家集をむしろ類聚的編纂意識が濃厚なものであるとされるところから、この一連の歌群はは

るかに早い時期の詠作と考えられて、IIIの贈歌を彼女の夫、藤原宣孝のものであると解された。竹内氏もまた今井氏と同様で

ある。このように、その詠作事情に対する見解は異なっているが、III番を男からの贈歌、III番を紫式部の返歌とされる点、またIIIの返歌が、贈歌をそのままに受けとめた素直な歌であるとして、「たえぬちぎりし世々にあせずは」という条件を受ける心情

結論を先に言うとは、この返歌を「世々にあせゆくのがおほかたの人の世の姿ではあるのだ」という、諦めにも近い愛の移ろいへの怖れを抱きながら、なお、「私達の契りが世々にあせないものならば」との切なる願望をこめた歌と解するのである。

は、「二人の仲は永遠につづくことであろう。」といったたぐいのものと想定される点は殆んど等しいものと思われる。なるほど、「けふのあふせはうらやまれけり」と終止形で止めた贈歌に比べ、「たえぬちぎりし世々にあせずは」という余情深い口調は、どちらかといえば女性の歌にふさわしいものであろうと思われる。しかし私は返歌の示すその余情を、「慰め」や、楽観的な推量と受けとることは納得できず、も

もともと仮定条件とは、森重氏も言われるごとく、「実現するであろう事態はまた実現しないであろうという限りで、実現の可能性の否定であり、また実現——不実現の対立的な想定である」し、そこに「希望・期待などの情緒を伴う」ものであるが、その「希望・期待」は、常にそれが不実現の場合をも一方には予想しているという対立において、未来に対するひとすじに明朗な眼をもつものではあり得ない。ことに「——ずは」という一段と屈折した仮定表

現の場合、それはまったく対立する場合の  
様相を、単なる仮定よりいっそう強く意識  
しているものである。したがって、

⑤ いつまでか野辺に心のあくがれむ花しち  
らずは千世もへぬべし (古今・春下)

君により我が身ぞつらき玉垂のみずは恋

しと思はましやは (後撰・恋二)

という歌の場合、「——ずは」の仮定は、

花の散る現実、みてしまった現実の確固た  
る認識の上に立つものであり、作者がそ  
でない状況を空想し仮定すればするほど、

眼前の現実はそれと対立するものとしての  
様相を濃くし、悲哀、絶望の響きを伝えて  
くる。つまり、「——ずは」という仮定条

件は、——である (或はあった) 場合の状  
況を明確に意識しているものであり、それ  
を否定したところから発する思考はそれだ

け空想的なものとなってしまう。ここに  
「——ずは」の仮定が多く「まし」と結び

作品名	用例	反表仮想	未来への 願望	怖るべき未 来の予想	単なる仮定
古今集	7	3	1	3	
後撰集	9	4		2	3
拾遺集	10	5	2	3	1
後拾遺集	8	5	2	1	
源氏物語	8	4	(2)	2	

ついで反表仮想の意を示すものとなる原因  
があるように思われる。そこで、「ずは」  
の形の仮定条件と、それを受ける語句との  
関係を、歌に限って考えてみた。

このように、——である (或はあった)  
現実を強烈に意識するこの形の仮定は、そ  
れゆえに未来の予測においても、

夜もすがらちぎりしことを忘れずはこひ  
む涙の色ぞゆかしき (後拾遺・哀傷)  
さだめなき風のふかすは花薄心となひく  
かたはみてまし (同・秋上)

という願望を表わすか、もしくははその反対

に、

かたいとをこなたかなたによりかけてあ  
はずはなにをたまのをにせん (古恋一)  
逢ことのかた蓋がりて君こずはおもふ心  
のたがふばかりぞ (後撰・恋四)

いかにせむ我身くだれる稲舟のしばしば  
かりの命堪ずは (後拾遺・雑下)

のように、未来における好ましくない事態  
を仮定して、不安と恐れを表現しているの  
である。これもまた、屈折した願望の表現  
と言えはしないだろうか。

ところで右の表の『源氏物語』の歌には、

( )を記したものが二例ある。いずれも未  
来に対する切実な願望を示すと思われるの  
であるが、これらはちよつと『紫式部家集』  
川番の歌と同様に「—ずは」の条件節で  
止めた歌なのである。

結びつる心も深きもとゆに濃き紫の色し

あせずは (桐壺)

紅のひとはな衣うすくともひたすらくた

す名をしたてずは (末摘花)

さきの歌は光源氏初冠の日、ひき入れ役  
を勤めた左大臣のものであり、後の歌は末  
摘花から源氏に新年の衣服を贈つて来たこ  
き、それを持って参上した命婦の歌である。  
後の歌からさきに考えてみたい。

この時末摘花から贈られた衣服というも  
のは、「今様色のえゆるすまじく艶なう古  
めきたる、直衣の裏表ひとしうこまやかな  
る、いとなほなほし」き代物で、それを源  
氏に披露する命婦が、「あやしき事のはべ

るを」ととまどわねばならなかつたほど趣  
味の悪いものであった。しかもそれにつけ  
てある歌ときたら。「さてもあさましの口  
つきや」とあきれはてて、「なつかしき色  
ともなしに何にこのすえつむ花をそでに触  
けれむ」と我が身の軽はずみを悔いつつ手  
すさびをする源氏に、命婦は「なほあるや  
うあらむと思ひ合はする折々の月影などを、  
いとほし」と思いながらこの歌を詠みかけ  
るのである。この命婦の歌は、

命婦末摘のかた人してよめる也

(『源氏物語細流抄』)

その一度染めの着物が薄いように貴方様  
の御愛情薄くても、すっかり姫君の不名  
誉になるような評判をお立てにならない  
で下さればありがたいのですが。

(玉上琢弥氏『源氏物語評釈』)

あなたの御愛情がひと花衣のように薄く  
ても、一途に姫君をおけなしになって悪

い評判をお立てにならないで下さいまし  
たら

(谷崎潤一郎『新々訳源氏物語』)

などと解されているが、これらの解はや  
はり「ずは」の表現の中に、切なる願望の  
意を汲みとつたものであると言えよう。あ  
まりにも完璧すぎるほどの源氏にとって、  
この姫が他の夫人方と並ぶ愛の対象になれ  
るとは思えない。このまま打ち捨てられて  
も致し方のないお方、と命婦は思っている。  
「心苦しの世や」のひとり言である。しか  
し彼女にはこの恋の、姫のためには悲惨な  
成り行きが予想されるだけにいっそう「ひ  
たすらくたす名をし立てずは」と源氏のや  
さしさに縋らずにはいられない。このまま  
打ち捨てられてしまつたら、命婦は、  
父宮亡き後ひっそりと貧しく、しかし静か  
に暮らしていた末摘花の生活に、ただ波風を  
立てただけの役わりとなつてしまふ。「御

愛情は薄くともせめて」と彼女はひたすら源氏に願わないでいられない。来たるべき

不安な未来が思われるための、切なる願望をこめた仮定表現である。略されていることは、「いかにうれしからまし」といったたぐいのものであるうか。

桐壺における左大臣の歌は、加冠の式後さぶらひ所において、主上から盃のついでに「いときなきはつもとゆひにながきよをちぎるころは結びこめつや」と問われた

折の返歌である。玉上氏の『源氏物語評釈』では、「心をこめて結びました元結、紫の濃い色が薄らぐが、若宮のお心が変わりませんならば（とそれのみを頼みおります。）と訳されている。この歌は「幸せな契りは永遠に続くことだろう。」という単なる祝賀の歌ではなくて、最愛の娘を源氏に託そうとする左大臣の、婿君の親である主上に対し、どうか未長くよろしくと訴え

る、真情溢れた歌と解する方が適當であるう。

さて、こうした諸例をもとに『紫式部集』三番の歌を考えると、これはもう単に樂觀的な未来を歌おうとするものとは私には考えられない。やはり「いかにうれしからまし」といったことばの続くべき、祈りにも似た悲願をこめた歌ではないかと思うのである。

橋本進吉氏は万葉集における「ずは」の仮定について、「ずは」で導かれた語句は、何れも自己の苦しく耐へ難いものと観ずる現在に於ける現実の身心の境遇から脱却する事を条件として挙げてゐる。」と説明されている。適うかどうかかわからないこと、むしろ現実では適わぬ怖れの強いことがらに對してなお「そうであれば」と願わずにはいられない心、それが「ずは」という仮定の表現をもって示されたのではないか。

このように考えると式部集三番のこの歌は、

今宵七夕の逢瀬は雲のよそのこと  
 ございますが、私達の契ええ世々にあせない  
 ものでございましたら（私はどれほど嬉しいこと  
 ございましたら。）

という相手への訴えをこめたものとなる。これは決して男の歌ではあり得ない。三番を男からの贈歌、三番を式部の返歌であるとは考える。

家集三番において式部は、「しののめのそらきりわたりいつしかと秋のけしきに世はなりにけり」と男の心変わりを嘆いた。専心に愛を語りつづけた相手の、早くも移ろうとする頼みがたさを彼女はじっと見つめている。色あせ移ろいゆくのがこの世なべての契というものではないだろうか。「絶えぬちぎりし世々にあせずは」強い疑惑を心に抱いてこう詠む時、それは男女の

愛の様相を、体験を通して見据えた者の諦めにも近い悲願がこめられる。この前後、家集には夜離れを嘆く歌がつづいている。この贈答もまた「同じすぢ」のものであるう。

ところで彼女がこうした歌を贈る相手、それは「年若い殿上人」でもなく「プラトニックな愛」を交わしている男でもない筈である。矜持高い式部からこのような切なる訴えを寄せられるにふさわしい存在、家集から考えるかぎりそれは彼女の夫、藤原宣孝ただ一人である。94、「おほかたのあきのあはれを思ひやれ月こころはあくかれぬとも」の詠歌と同様に男の心の定めなさを見つめながら、なお夫の真心に呼びかけようとする式部の心の哀韻が惻々と脈打つ名歌であると私には思われる。

110、111の歌を、仲の良い夫婦の息の合っ

た贈答といった風に考えることに何とないともどいを感じていた私は、こうして「ずは」の仮定表現を考察することによって、来ぬ夜「世の常に考えれば不吉な筈の年に一度の星逢いさえ、あなたに逢えぬ今宵の私にとっては羨ましい。(お逢いしたのですが余儀なく)」とことば巧みな慰めを贈ってきた宣孝と、心底に「絶えてしまうのではないか」という怖れを抱きながらなお訴えかける紫式部との贈答であるとの結論を得た。この結論は私の直感とは非常によく合うのであるが、それだけに却って確信をもてないまま、一応研究ノートとしてまとめてみたものである。

—了—

註

- ① 紫式部集の伝本には「ゆゝし」と「ゆかし」の二通りがあるが、竹内美千代氏が『紫式部集評釈』（桜楓社）

で詳説されたように「ゆゝし」と解すべきであると思う。

② 東京堂昭和二十九年版

③ 吉川弘文館「人物叢書」昭和四十一年版

④ 森重敏氏「仮想の世界」(『国語国文』三八卷一〇号)

⑤ 引用は『国歌大観』による。

⑥ 源氏物語の引用は、玉上琢弥氏「源氏物語評釈」(角川書店)による。

⑦ 橋本進吉氏「上代語の研究」(岩波書店)

⑧ 紫式部集九四番、「又おなしすぢ九月々あかき夜」

⑨ 岡一男氏前掲書

(資料とした紫式部集は、三谷邦明氏の翻刻された実践女子大蔵のもの)『源氏物語とその周辺』(武蔵野書院)に収録を用いた。